

川さらしの季節

12月から3月の寒風吹きすさぶ季節、日本古来の紙である手漉き和紙製造のためにコウゾ(楮)やミツマタ(三桠)などの樹皮を剥ぎ取って綺麗な水で漂白する作業『川さらし』が和紙の産地で行われています。

普段、白い紙を作るための漂白には薬品が使われますが、伝統的な手漉き和紙では薬品による漂白が行われておらず、樹皮の一部を細かくした紙料を束ねて、冷たく澄んだ川の中でさらすことで徐々に白くしていく作業が行われます。これを『川さらし』と言います。この季節になると、『川さらし』の様子がよくニュースでも報じられていますから、目にした方もいらっしゃると思います。

伝統的な手漉き和紙^すと言えば、2014年にユネスコの無形文化遺産に登録された石州半紙^{せきしゅうはんし}(島根県浜田市三角町)、^{ほんみのし}本美濃紙(岐阜県美濃市)、^{ほそかわし}細川紙(埼玉県小川町、東秩父村)の技法が有名で、他にも日本三大和紙として越前和紙(福井県)、土佐和紙(高知県)、美濃和紙(岐阜県)が知られています。また、現在知られている日本最古の紙は、正倉院に保管されている702(大宝2)年の大宝律令の際に、御野(美濃)国(岐阜県南部)、筑前国(福岡県西北部)、豊前国(福岡県東部と大分県北部)で漉かれた戸籍用紙とされています。

ところで、局地的に私と同じ名が多いことで知られる島根県^{いわみ}の石見地方では円頂火山に因む火山岩やその破碎岩が多い反面、サンゴ礁に由来する石灰岩できた地層が少なく、紙を変色させる原因となるカルシウムやマグネシウムイオンを含まない軟水が豊富にあるため、1年を通して質の変わらない紙を作ることができると言われています。

仏教には「滝行」という修行もありますが、いくつになっても教育は必要です。清らかな水(=教育)に身をさらし、新しい自分を見つめ直すことが求められているといえるでしょう。

参考図書

池田 寿(2017)『紙の日本史 紙と絵巻物が伝える文化遺産』勉誠社, 276頁。

有岡 利幸(2018)『和紙植物』ものと人間の文化史 118, 法政大学出版局, 317頁。



川さらし



代表的な和紙の産地